

2002年度修士論文要旨

その他のタイトル	Resumees der Magisterarbeiten 2002
著者	後藤 立也
雑誌名	独逸文學
巻	48
ページ	309-312
発行年	2004-03-19
URL	http://hdl.handle.net/10112/00018088

2002年度修士論文要旨

1. 後藤立也（文学研究科ドイツ文学専攻 [ドイツ文学]） 「リルケにおけるモチーフ研究」

『ドゥイノの悲歌』に現れる天使とは、何者であろうか？この疑問は『ドゥイノの悲歌』を読むもののほほすべてが抱くようである。その天使とは、リルケ自身がいうように、キリスト教の天使とは何の関係もないのだろうか？この天使が一体何を表すモチーフであるのかということを考えるにあたり、まずはキリスト教とイスラム教に描かれる天使を調べてみた。

天使と聞けば誰もが思い浮かべる、優しい、美しいイメージの多くは、キリスト教、イスラム教などに見られるもともとの天使像にはあまりないものである。われわれが思う天使像は、多くは守護天使などの人間を守ってくれる天使の役割に由来する。守護天使とは「キリスト者一人ひとりに付き添い、悪を避け信仰の守護となる」¹ものであり、「過去より現在に至るまでの人間全体の信仰の中で、天使の個人的守護者としての役割こそ、疑いもなく最も一般に愛されてきた認識である」²ということだ。人間一人一人にそれぞれ天使がついているという考え方は、人間にとって親しみやすく、それゆえに天使を身近に感じることができ、そのことから広く信じられていると思われる。

これらのキリスト教、イスラム教などに見られる天使は、それぞれの教義に違いがあるとはいえ、基本的には神と人間をつなぐ使者の役割を与えられている。「ここでは天使は人間の程度に下げられたり、日常の使

1 大貫隆・名取二郎・宮本久雄・百瀬文見編『岩波キリスト教辞典』、岩波書店、2002年、541ページ。
2 デイヴィッド・コノリー著（佐川和茂・佐川愛子訳）『天使の博物誌』、三交社、1994年、47ページ。

用に合わせられたりしない。』³『悲歌』の天使を考えるに際して、一番の障害となるのが本来の、神の使者としての天使には関係のない、あとからつけられた、人間にやさしい（例えば守護天使に見られるような）イメージである。リルケが『悲歌』の天使はイスラム教の天使に近いといったのも、イスラム教の天使が比較的本来の使者としての天使像に近く、人間を守るなどというようなイメージがついていないことからではないかと思う。また天使はその知恵においては人間以上神未満とされ、道徳的にはほぼ完全な善い存在とされている。宗教に見られる天使には、実際に様々な性格や役割が与えられており、われわれがまず思い浮かべる守護天使的な姿は、その中のひとつにしか過ぎないことがわかるだろう。

『悲歌』の天使を一般的な優しいイメージの天使像にとらわれず見直せば、そこには宗教的天使との多くの一致があるのに気づく。たとえば、『悲歌』の天使をリルケは「恐ろしい」というが、聖書に出てくる天使は人間に対して自分から「恐れるな」という。だが当然のように、二つの天使の「恐ろしさ」の背後にあるものは全く違う。『悲歌』の天使の場合は、リルケにとっての理想である天使が、はかなく移ろいやすい人間からあまりに離れているので人間にとって「恐ろしく」思われ、聖書の天使の場合は、それらを遣わす神を畏れる気持ちから人間にとって「恐ろしく」思われるのである。つまり「恐ろしい天使」という姿は同じで、その本質が違うといえる。では、そのリルケにとっての理想とはどういうものなのだろうか。それはいわゆる「全一」というものだと思われる。手塚富雄が「全一」的なものの性格の一つとしているのは「地上的な不安や無常性を捨象するのではなく、かえってそれを不可欠の要素として包含している」⁴ということである。これをわたしが自分流に解釈させてもらうとすれば、「全一」とは今現在の状態と、それと相反する状態までもすべてを肯定的に含んでいることであると思う。つまり、そのものだけで、そのもの以外のすべてをも含むという、リルケ独自の考えである「世界内面空間」(Weltinnenraum)にも通じるであろう。

『悲歌』にはここだけでなく、他にもありとあらゆるところで宗教的

3 Schmidt-Pauli, Elisabeth: Hiersein ist herrlich. Konstanz-Nussdorf 1948, S. 136.

4 手塚富雄『手塚富雄著作集 第四巻』、中央公論社、1981年、171ページ。

な天使との共通点が見られる。たとえば『第二悲歌』においては、かなり直接的に聖書外典のトビト書の天使が言及されている。トビト書の人間を守る天使と対になって『悲歌』の恐ろしい天使が出てくるのである。もしも全く何の関係もないならば、対になったり比較されたりするだろうか。そんなことはないだろう。トビト書のラファエルと、ここでいわれる「大天使」はその姿は同じであるが、そこに込められた意味が違うのである。だからこのようにして、比較の対象ともなりうるのだ。

『悲歌』の天使に関係のないのは、どうやらわれわれが天使と聞いて一般的に思い浮かべる、守護天使的なイメージだけなのである。そういったイメージを除いた天使が『悲歌』に出てくるのであるが、その天使も姿かたちや表れ方が宗教的な天使に通じるだけであり、その背後にある本質的な部分はリルケ的な「全一」であるのだ。

このように、天使というモチーフにリルケ的な「全一」の内容を入れるか、もしくは宗教的なものにするか、そのモチーフの中に入る思想内容に違いはあるものの、表に出てくる姿であるとか効果であるとかはとても似通っている、というように、同じ姿でありながら本質が異なるということは、リルケの詩作にはよく見られるのである。例えば、『新詩集』の『オリーブ園』では、イエスは、神を見失い、自分自身すらなくした一人の人間としてのイエスである。つまり、ここでイエスはキリスト教的解釈から自由になり、神の不在に苦悩する一人の人となっている。聖書のイエスの姿を借りて、リルケは絶対的な孤独のモチーフを描いているのだ。

『悲歌』における「全一」というものを表現するのに、それを体現する具体的な呼びかけるべき対象を必要としたリルケは、キリスト教などに現れる天使に目をつけたのだろう。「全一」という概念は確かに超越的ではあるが、正の局面のみならず、負の局面をも同時に不可分に持っているのである。呼びかける対象とって、すぐに思い浮かびそうなのは神であるが、神は正の方向へ超越しすぎているので、「全一」の対象として呼びかけるわけにはいかない。しかし天使はちょうどいいのである。天使はあらゆる面で人間以上であるが神にはかなわず、つまり神の程度には超越することができず、また、神の使者として地上に降りてくることから、天と地上の両方の性格（正と負の両面）をあわせ持つことがわ

かる。この天使の性格には、リルケの理想である「全一」のそれに非常に近いものがあり、だからこそリルケは呼びかける対象として天使を選んだのだろう。キリスト教などに見られる守護天使としての役割というような、人間にやさしい天使像は、『悲歌』の天使には必要なかったので、そのようなイメージの比較的少ないイスラム教の天使に『悲歌』の天使は近いとリルケはいったのだと思われる。

『悲歌』の天使は決してキリスト教の天使とは無関係ではない。宗教的な天使の姿を借りて、リルケの理想とする思想である「全一」を表すモチーフとして、『悲歌』の天使は描かれている。